

—伝統と進取の気風の地—

(1) 古都の再生と文教地区の形成

明治維新により、京都は東京遷都という大きな変動を迎えた。天皇だけでなく、新政府の官僚、多くの公家衆、各藩の京都詰役人、そして一部の御用商人も京都を離れた。そんな逆境にも負けず、伝統と進取の気風を併せ持つ京都の人々は、再生に向かって自前の産業や都市機能を作り上げ、近代化を成し遂げた。その象徴として琵琶湖疏水があり、建都千百年記念事業の開催地である岡崎がある。

この項では、まず近代化に大きな役割を果たした、白川の扇状地に広がる岡崎・吉田及びその周辺（以下、「白河（岡崎・吉田）」という。）の近世以前までの歴史的背景を示すとともに、近代化の象徴である琵琶湖疏水について示し、そのうえで、白河（岡崎・吉田）についての歴史的風致を示していく。

ア 白河（岡崎・吉田）の歴史

(7) 近世までの歴史

東山の麓に位置する白河（岡崎・吉田）は、白川の扇状地として広がりを持ち、背後に東山を従えた自然風景豊かな土地であって、平安時代前期より藤原氏等の別業が多く営まれる土地であった。

院政期には、白河天皇による法勝寺をはじめとする六勝寺が造営されるとともに、院御所である白河殿が造営された。この地が院政の中心地となり、多くの貴族たちが出入りするようになると、一般の人々も多く集まるようになり、平安京と一体化して「京・白河」と称される副都心が形成された。

中世に入り武士の時代になると、院政期を代表するこれらの寺院建築群は徐々に姿を消していき、その後近世にかけては、平安京の近郊農村地としての役割を担うとともに、東海道の交通の要衝の地としての性格も持つようになった。一方で、室町時代には、亀山上皇によって創建された南禅寺が京都五山の上に置かれ、五山文化の中心地としての側面もあった。なお、江戸時代には、現在の清風荘の前身である清風



図2-61-1 院政の頃の白河 出典 京都の歴史 2

館が徳大寺家の別邸として建設されている。

幕末になると、平安京がにわかに政治の中心地としての色合いを帯び、郊外であるこの地にも、大規模な藩邸が多く建設された。尾張徳川屋敷が後の京都帝国大学となる等、これらの藩邸の地が明治以降様々な施設の地として利用されていく。

(イ) 近代化とるおいをもたらす琵琶湖疏水

そして明治時代に入り、白河（岡崎・吉田）は大規模な開発が行われ、京都の近代化にとって大きな役割を果たすことになる。

京都は、琵琶湖疏水に代表される近代歴史遺産の宝庫でもあり、この先進の自負が、京都に暮らす人々にとって誇りであり、心の拠り所のひとつにもなっている。

琵琶湖疏水は、明治維新による東京遷都で衰退した京都に活力を呼び戻すため、近代化策（京都策）の事業の一環として、明治23年（1890）に建設された。京都にとって、琵琶湖から水を引くことは長年の夢であった。その後、明治45年（1912）には、第二琵琶湖疏水が建設され、水道事業や市電敷設等が行われ、今日における京都の近代的まちづくりの基礎となるとともに、東山山麓の持つ豊かな自然環境と疏水の豊富な水量を利用した南禅寺界隈の邸宅群が形成されていった。



図2-61-2 琵琶湖疏水



写真2-93 琵琶湖疏水



写真2-94 蹴上発電所 (非公開)

イ 具体事例

(7) 琵琶湖疏水と邸宅群

琵琶湖疏水は、琵琶湖取水地点から伏見区堀詰町で一級河川濠川^{ほりかわ}となる地点までの「第1疏水」、第1疏水取水地点の少し北側から全線トンネルで蹴上付近で第1疏水と合流する「第2疏水」、第2疏水取水口付近の立坑から全線トンネルで安朱で第2疏水に合流する「第2疏水連絡トンネル」及び蹴上付近から分岐して左京区北白川久保田町に至る「疏水分線」からなっている。

現在、琵琶湖疏水は水道原水のほか、発電、かんがい、防火及び工業などに利用されており、市民の生活になくはならないものである。また、琵琶湖疏水の建設に伴い整備された、蹴上発電所や蹴上浄水場、インクライン等の関連施設は近代化産業遺産としての認定を受けるなど、京都の近代を代表する建造物として親しまれている。

そして、開削から120年余りが過ぎようとしている現在においても脈々と琵琶湖から京都市へ命の水を供給し続けている。その本来機能のみならず、岡崎では、優れた近代土木景観と緑豊かな水辺空間という観点からも、市民に親しまれている。例えば南禅寺境内には、当時としては画期的な洋風建造物の水路閣が設置され、今日では緑豊かな周囲の歴史的景観によく溶け込んでいる。また、哲学の道は西田幾多郎などの哲学者らが歩いた道として知られ、現在でも春の桜や秋の紅葉をはじめ、多くの人々が散策するなど、疏水沿線は散策の場として市民に親しまれている。



写真2-95 哲学の道



写真2-96 南禅寺水路閣

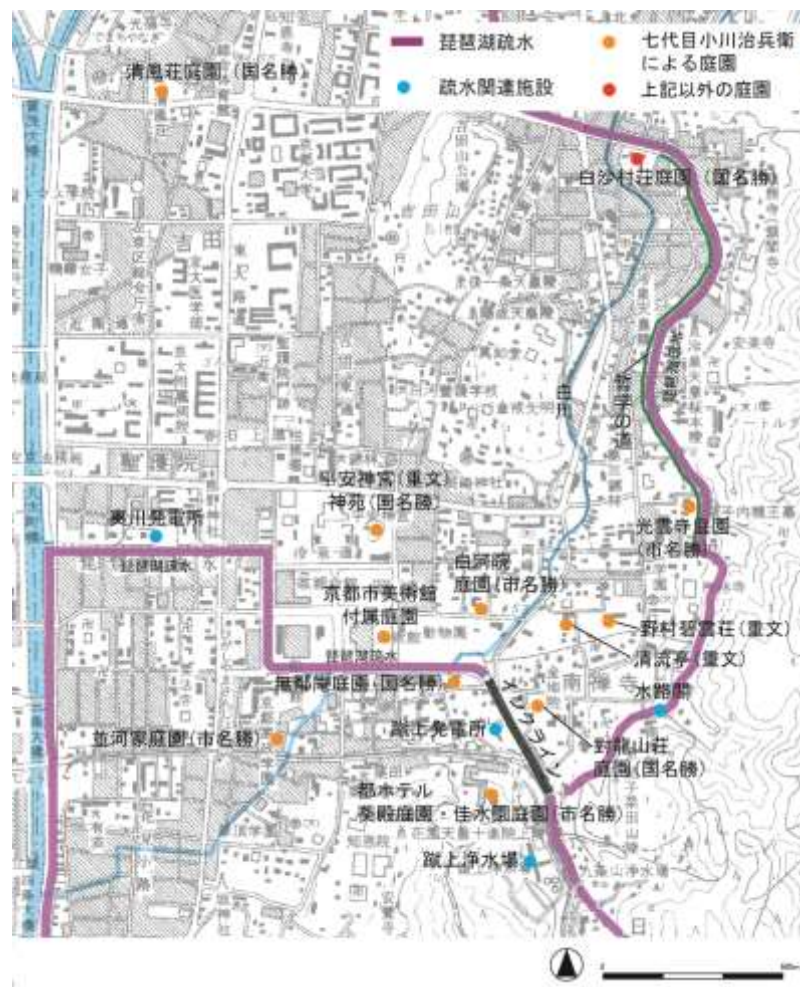


図2-61-3 琵琶湖疏水と邸宅群

岡崎では、専用管により疏水の水をまず京都市動物園に引き入れ、園内の水路や池を経て、岡崎道をはさんだ西側の京都市美術館の庭園と北側に位置する平安神宮神苑（国名勝）へと落とし込んでいる。

南禅寺界隈でも同様に、野村碧雲^{へきうんそう}荘（重要文化財）や清流亭（重要文化財）、

たいりゅうさんそう 対 龍山荘 (国名勝), むりんあん 無鄰菴 (無鄰庵庭園：国名勝) などいくつもの庭園を次々と巡る水の道が何ルートも存在する。水の道は時としてまちの中に姿を現し、堀越しの緑や垣とともに人々の目にうるおいを与えている。全体の仕組みそのものが疏水の開通と7代目小川治兵衛という庭師との出会いが生み出した近代の庭園風景や界わいの風致の形成に重要な役割を果たしている。



写真2-97-1 京都市美術館 庭園



写真2-97-2 邸宅の町並み

無鄰庵は、山縣有朋^{やまがたありとも}が京都市から借地し明治29年（1896）ごろに建設したもので、七代目小川治兵衛による庭園を持つ、南禅寺邸宅群の先駆けとなった邸宅であり、現在、本市の施設として公開している。日出新聞には、明治28年8月8日の記事に苑池への疏水からの引水工事を京都市の水利事務所の技手が行う旨の記載があるほか、無鄰庵の建設についての記事が数々掲載されている。昭和8年（1933）に編纂^{へんさん}された「公爵山縣有朋公伝」には、無鄰庵での政財官の有力者との会見について記載があり、無鄰庵は政財官の有力者との会合の場としても利用されていたことが分かる。

界限の邸宅群は、個人のためだけの施設としてのみ存在したわけではなく、その中で茶会や園遊会等を催すことを前提とした整備がなされ、実際にも国内外の招客のための迎賓的な役割を担っていた。大正大礼や昭和大礼が行われた際に、これらの邸宅群が京都を訪れた皇族等の要人たちの宿舎とされたことも、その役割の一つと言える。そして、これらの邸宅は所有形態こそ変わってきているが、現在でも迎賓的な施設としての役割を果たしている。

人をもてなすため、これらの施設では日々庭園等の手入れを行う。七代目小川治兵衛による庭園を持つ数多くの邸宅が群をなし、また南禅寺をはじめ、庭園を持つ寺社が多く存在する南禅寺界限は、日本の庭園技術の粋が集まる場であると言えよう。手入れの行き届いた庭園が集積する地では、人々の庭を見る目が自然と養われ、造園技術が磨かれる。南禅寺界限では、庭園の花や葉の色付きはもちろんのこと、春から初夏にかけての芽摘み、お盆前や暮れの手入れなど、その手入れからも四季を感じずにはいられない。

人をもてなすこと、そしてそのために、日々手入れを怠らないこと。南禅寺界限を歩くと、人をもてなすため手入れの行き届いた邸宅群の有様に、凜とし

た中にも人をもてなす心を感じる。その悠然とした門構え、通りに続く塀や垣は、内側に特別な空間の存在を思わせる。そして、邸宅群などでのそれらの営みが、風情豊かな疏水施設、背後の東山の風景と一体となって、自然豊かな四季の移ろいと、近代化への先人の心意気を感じさせる。



写真2-97-3 名勝 無鄰庵庭園



写真2-97-4 春に行われる芽摘み
(名勝 無鄰庵庭園)

(イ) 建都千百年記念事業と平安神宮

この疏水事業の中心の地、岡崎において、開削後の明治28年(1895)、建都千百年記念事業として、第4回内国勸業博覧会と平安遷都千百年記念祭が開催された。それまで東京を会場としていた内国勸業博覧会の京都における開催は、当時の総理大臣伊藤博文が、記念祭との合同開催によって日本の歴史を世界に向けて示すことを目的に決定したとされている。

記念祭場として桓武天皇を祭るため造営された平安神宮(重要文化財)は、その社殿が平安京大内裏の朝堂院を模したもので、京都の氏神と位置付けられた。三条通りから北側の旧栗田口通り(現神宮道)は、平安神宮の表参道として位置付けられ、明治27年に道路拡張された。昭和3年(1928)には大鳥居(国登録有形文化財)も建築されている。記念祭の呼び物として行われた時代行列は、1100年にわたる京都の都としての風俗の変遷を描いており、以後、この行列は「時代祭」と呼ばれて今日まで続けられている。この記念祭と内国博は、京都の都としての歴史を再確認するとともに、近代京都としての出発を強く印象付ける事業となった。

時代祭は、京都市全域から組織される「平安講社」がその運営に当たり、元学区と呼ばれる自治組織の連合会が輪番制でこの祭りを担っている。京都御所から平安神宮に至る時代祭の巡行路は、京都の時代変遷絵巻を彩る行列の舞台

となっている。市民はこの祭の運営を担うことによって、京都の歴史に想いをいたす特別な時間を過ごす。そして、岡崎の地の平安神宮は、京都の1100年の歴史のシンボルとして存在しているのである。

平安神宮は、伝統と進取の気風の地である岡崎にふさわしく、伝統を基盤に置いた新しい試みがなされる場として現在も活躍している。中でも、昭和25年に京都市と京都能楽会の共催で始まった京都^{たきぎのう}薪能は、平成21年（2009）の6月に60回目を迎え、初夏の京都の風物詩となっている。平安神宮の拝殿前に特設舞台を組み、四隅には^{いみだけ}斎竹を配し、夕闇が迫るころ、かがり火の炎が揺らめく中で夕闇に浮かび上がる社殿を背景に、幽玄の世界が繰り広げられる。



写真2-98 京都薪能



写真2-99 時代祭（平安神宮前）



写真2-100 大鳥居

このように、伝統と歴史と近代への躍進の地である岡崎では、近代以降、伝統を基盤とした時代祭や京都薪能などの新しい活動が生まれ、既にそれ自体伝

統として根付いている。これらの活動が、この地の象徴である平安神宮と一体となって、京都の風物詩として市民に受け入れられ、楽しみの一つとなっている。

(ウ) 文教地区としての白河（岡崎・吉田）

記念祭・内国博に引き続き、博覧会跡地には、シンボルとしての平安神宮を中心にして、美術館、工業館などの施設が残され、常設の展示場として利用された。その後、武徳殿（明治32年（1899））が開設されたほか、東宮御慶事に際して寄せられた寄付を利用し、学術の府を唱える京都市にふさわしい事業として動物園（明治36年）が整備され、商品陳列所、府立図書館（明治42年）等が建設された。大正期に入ると大正大礼（大正4年（1915））に伴い、岡崎で大典記念京都博覧会が開催され、第一勸業館や第二勸業館、商品陳列所などがその会場となった。そして、大礼に際して二条離宮内に建設された舞楽殿^{ぶがくでん}が移築され、京都市公会堂として整備された。また、昭和大礼に際しては、後に記念として大礼記念京都美術館（現京都市美術館）（昭和8年（1933））が建設されるなど、岡崎は明治以降文教地区として着実に整備されていった。

この文教地区の整備は、京都が1100年にわたって培われた伝統と歴史の基盤の上に、新しい近代西洋文明を受け入れて実現されたものであり、岡崎の地はここから、新しい京都の産業や文化の拠点として、市民とともに新しい近代都市景観と、歴史を背景とした新たな文化芸術活動等をつむぎだしてきたのである。

岡崎地域内には近代のまちとしての要素となっている数々の建物があるが、京都市美術館は、その代表的な建築物の一つである。東京から京都に洋画研究の新たな活動の地を求めてきた浅井忠を慕って、若き画家たちが明治39年岡崎の地に、関西最大の洋画研究所「関西美術院」を創設した。ここからは安井曾太郎をはじめ梅原龍三郎、須田国太郎らが国を代表する画家達が数多く輩出し、京都は日本的洋画の発展のメッカとなった。現在もその伝統は続いており、昭和8年に完成した京都市美術館、そして国立京都近代美術館とともに、岡崎の地に美術の香りを醸している。

京都市美術館は、明治40年に「文展」として始まった100年もの歴史を誇る「日展」が開催されることで知られる。

明治40年に創設された「文展」は東京で開催されたが、明治43年の第4回は京都でも誘致し、「京都市博覧会館」で催した。その後、東京と京都での開催が定着し、京都市勸業館を主会場に、毎年行われていたのだが、昭和8年

に「京都市美術館」が開館すると、まさにふさわしい会場として歓迎され、その後京都市美術館の主要な催しの一つとなった。「文展」は「帝展」という名称を経て昭和21年には「日展」と改称され、京都以外の地方展も行われるようになり、現在に至っている。現在、「日展」においては、日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の5部門で構成され、今なお公募展の中では最高の権威を誇っている。

毎年春に開催される、新進作家の登竜門としても知られる「京展」は、昭和10年に始まる「市展」の流れを汲む全国公募展であり、日本画、洋画、彫刻、工芸、書、版画の6部門で構成される。

旧武徳殿（重要文化財）は遷都千百年記念事業の一環として明治32年に造営された我が国最古の演舞場で、桓武天皇が平安京武徳殿で武技を奨励したことに因んでおり、落成式の様子が同年5月5日の日出新聞に掲載されている。現在でも現役の武道場として活躍しており、毎年5月のゴールデンウィークには、明治28年の武徳祭大演武会に由来する、全日本剣道演武大会（京都大会）等の、武道家にとって大切な大会等が行われている。大会の当日には、旧武徳殿からは武道の音がこだまし、周辺では武具等の市が立ち、多くの武道家で賑わう。



写真2-101-1 京都市美術館



写真2-102-2 旧武徳殿



写真2-102-3 旧武徳殿での演武大会の様子1

協力：京都府剣道連盟



写真2-102-4 旧武徳殿での演武大会の様子2

提供：京都府剣道連盟

他にも、前川國男が設計し、昭和35年に開館したモダニズム建築・京都会館は50年を超える歴史を持ち、多くの音楽や演劇、芸能を市民が身近に楽しめる場として、そして市民の文化的欲求を満たす文化創生の拠点として、長く愛されている。労演で親しまれる京都労働者演劇鑑賞会などは開館当初から続くもので、会館とともに歴史を刻んできた。また、明治36年に全国で2番目に開園した動物園は、市民の寄付金と市債により建設された動物園として最も古い歴史を持っており、現在でも幅広い世代の市民に愛されている。



写真2-102-1 京都会館



写真2-102-2 京都市動物園

その北に位置する吉田界限では、明治22年に大阪から移転した第三高等中学校を皮切りに、京都帝国大学等の高等教育施設群が次々と設置された。現在でも、京都大学本部構内正門(旧第三高等中学校正門)(国登録有形文化財)や、京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター(国登録有形文化財)等の近代建築が教育施設として存在しており、岡崎とともに白河(岡



写真2-102-3 京都大学本部

構内正門・時計台 提供：京都大学

崎・吉田) 一帯が文教地区としての様相を呈している。

これらの施設を取り巻くまちでは、関連する生業を営む店舗によるまちが形成されている。平安神宮参道として整備された神宮道の沿道には、多くの画廊が存在し、様々な美術品が展示され、芸術のまちとしての雰囲気を醸し出している。また、旧武徳殿の周辺には、武具店が点在しているほか、一帯に古書店等も存在し、文教施設を支える営みが続けられている。また、今出川通に面した知恩寺では、毎年秋に古本市が開催され、平成25年で37回を数える。そこに並べられている古書は、一般の書籍とともに、学術書や美術書等も並べられており、地区の特色が表れている。

さらに、周辺には^{かぐらおか}神楽岡の住宅開発(谷川住宅群等)や北白川の住宅開発等の良好な住宅地が多く形成され、これらの住宅地には京都大学の関係者も多く住まいした。これらの住宅地は、現在でも良好な住宅地として存在し、往時の姿を今に伝えている。



写真2-103-1 画廊と鳥居



写真2-103-2 良好な住宅群(谷川住宅群)

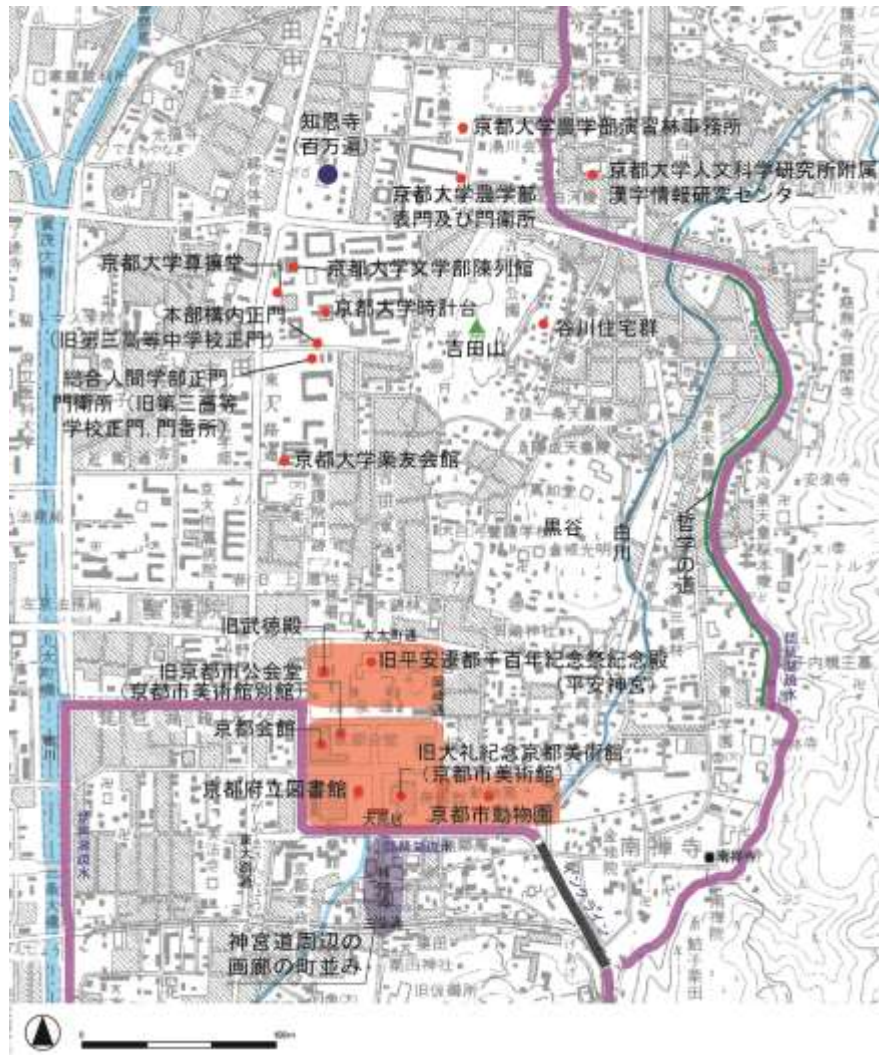


図2-62 文教施設

このように、岡崎の文教地区では、内国博の跡地を中心に、岡崎から吉田にかけて形成された、京都市美術館や京都会館、旧武徳殿、高等教育施設群をはじめとした近代建築群等を舞台として、日展等の展覧会や演劇公演などの芸術活動、武道大会等が行われている。また、これらを取り巻く町には、芸術や教育、武芸に関連する生業が多く存在している。

これらの施設群、町並み、営みが一体となり、文教地区としての風情を醸し出し、訪れる人々は、これらの施設群、町並み、営みを通し、京都が今なお伝統と進取の気風を持ち、文化・芸術、教育、武芸等の中心地のひとつであることを感じる。

ウ 古都の再生と文教地区の形成に見る歴史的風致

白河（岡崎・吉田）は、東山の山並みを背景に、1100年にわたる都として

の歴史を思い起こさせる平安神宮と、伝統を基盤とした新たな文化活動の拠点としての役割を担う京都市美術館等の数々の近代建築や山麓に形成された邸宅群が、ケヤキや桜の並木、疏水の流れ、また、そこで行われる伝統と革新の文化活動と一体となって、人工と自然とが融合する、独自の地域を作り出し、訪れる人々は文化の香りを楽しんでいる。

(2) 大都市を支えた地域

伝統と進取の気風に富んだ京都の商業・業務の特徴は、伝統的な産業と近代化産業が相互に刺激し合い交じり合いながら発展し、また大都市として古くから活発な消費活動が行われてきたことである。

この項では、東海道の西の起点に位置し、近世以降の商業・業務の中心地として、大都市を支えてきた三条通りを事例として、大都市を支えた地域の歴史的風致を示していく。

ア 具体事例

(7) 三条通

平安京の三条大路にほぼ該当する東西路で、天正18年（1590）豊臣秀吉が三条大橋を架橋、近世には東海道の西の起点であり、高瀬川の船着場に近接しているなど、物流や情報が集まる地域として賑わった場所であり、京都の中心地として旅籠や両替商、飛脚問屋などが集積していた。こうした繁栄は明治期に継承され、公共建築、銀行、事務所、繊維関連の大商社、文化施設など近代建築が建ち並ぶ京都の中心商業・業務地として、脚光を浴びた地域である。

明治45年（1912）に烏丸通が拡幅されると、次第に銀行や企業の事務所は烏丸通沿いに移転していったが、ビジネスセンターが移転することで、三条通には、多くの近代建築や町家等の伝統的店舗の混在した町並みが更新されることなく存続する結果となり、明治・大正期の面影を残す京都を代表する町並みが残されることになった。



写真2-104 三条通り

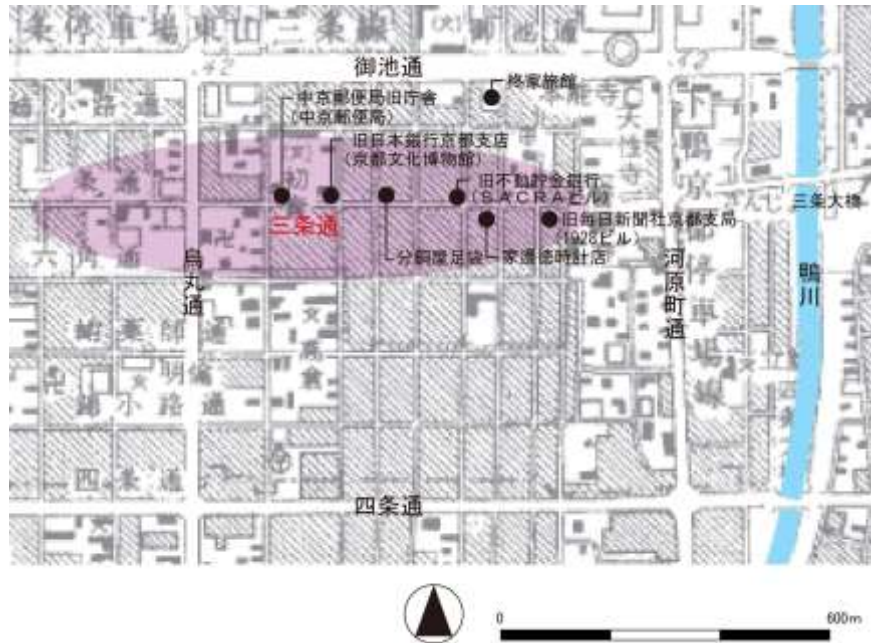



图2-63 三条通

現在、三条通は、歴史的な京町家や中には京都にはあまり見られない塗籠られた京町家、そして町家と比較すると圧倒的にヴォリュームの大きい近代洋風建築など、近世から現代にいたる各時代の建物が混在している。



このような町並みの中で、交通の要衝であった近世の頃から、足袋屋を営む分銅屋足袋などの伝統工芸品などを商う店や、柊家旅館などの旅館の営みが今でも行われている。

分銅屋足袋は、創業元治元年（1864）の老舗足袋専門店で、佇まいは商家の意匠を残し、特に袖看板から昔から商業の地だったことを思わせる。現在でも、足型のはがねやミシンを使い、伝統的な白足袋や狂言足袋などのほかに、50年程前から京友禅を使用した足袋も作られている。袖看板や暖簾から視覚と、店の奥から聞こえるミシンの「コトコト」という響きによる聴覚によって、昔ながらの店の趣と営みを漂わせている。




写真2-105 分銅屋足袋



写真2-105 分銅屋足袋

また、通りから筋を折れると、老舗旅館が立地しており、凜としたたたずまいのなか、京都に来訪する人々を迎え、もてなす営みが、昔と変わらず行われている。



写真2-106 柊家旅館

文久元年（1861）に旅館業の看板を掲げた柊家旅館の初代は福井県人で、文政元年（1818）に上洛し、郷里の海産物を商い、運送業を営むかたわら、郷里から京都に来る人などを乞われるまま泊めていたので、旅宿を副業としていた。その後、副業を本業としている。

これらの伝統的な建築とは対照的に近代以降に商業・業務施設として建てられた、旧日本銀行京都支店（現京都府文化博物館別館：重要文化財）や旧毎日新聞社京都支局（現1928ビル：京都市登録文化財）、

家邊徳時計店（国登録文化財）、旧不動貯金銀行京都支店（SACRA）（国登録文化財）、などの近代洋風建築が現存し、当時の面影をよく残している。これらの内の多くは、用途を

変えて活用されているが、中には中京郵便局のように、変わらない用途で使用されているものもある。中京郵便局は、明治4年に郵便事業が発足した際に、姉小路車屋町に設置された西京郵便役所が前身である。現在の建物は明治35年に建設されたもので、現在も中京郵便局（旧庁舎外観：京都市登録文化財）として活用されており、江戸時代には飛脚問屋の多かった三条通における近代化を象徴的に表している施設であろう。また、他にも旧毎日新聞社京都支社の



写真2-107 旧日本銀行京都支店

提供 京都府京都文化博物館



写真2-108 中京郵便局

ホールは、現在でも市民の利用できるホールとして活用されるなど、当時の商業・業務施設の趣や営みを残しているものもある。さらに、繊維関連企業は往時ほどの規模ではないものの、今なお多く存在している。

このように、三条通は近世以来の京町家や近代以降の近代建築などが混在する中であって、土産物屋や旅館など、近世の交通の要衝としての営みが京町家等の歴史的建造物において今なお行われ、京都を訪れる人々の姿を多く見かけることができる。人々は近世から近代、そして現在までの歴史の変遷を町並みとその中の営みを通じて感じることができる。

イ 大都市を支えた地域に見る歴史的風致

大都市を支えている経済・業務の中心地は、町の形態や構成要素が様々に変化しながら発展していく。したがって、様々な時代の様式の建築物が混在し、また業務形態もそれぞれの時代を特徴づけるものが混在することになる。

つまり、三条通に代表されるような、近世以前から町を形成し近代以降も中心地として発展してきた場所では、京町家等の歴史的建造物が家業とともに大切に受け継がれながら、その横では近代以降の新しい様式である近代洋風建築が様々な活用されており、京都の都市の奥行きを感じることができる。